

あなたの地域のページです

家の光

中国四国版

10月号もくじ

- 152—もう、侵入を許さない!
わたしたちの獣害対策
- 158—育てる楽しさ広めたい
- 160—痛快エッセイ トマトの気持ち
- 161—いいね! 仲間力
ミニトマトをジャムでPR
- 164—ほっとライン中国四国

種なしマスカット「瀬戸ジャイアンツ」の育種者の花澤茂さんの農園 (P158～) 写真・早田均



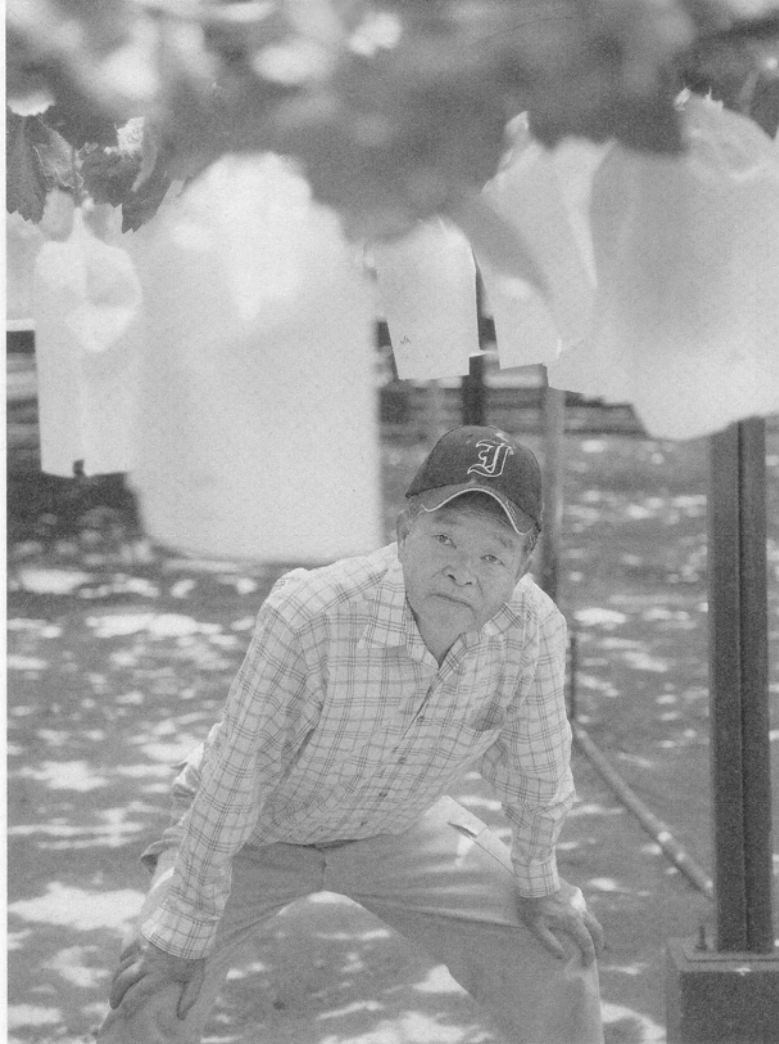
育種を手がける「ブドウの先生」

育ててる楽しさを広めたい

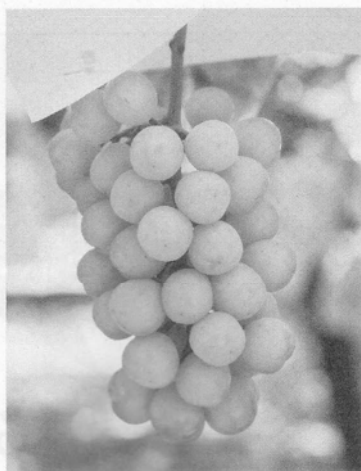
花澤茂さん 岡山県岡山市（JA岡山東管内）

種なしマスカット『瀬戸ジャイアンツ』の生みの親として知られ、さらなる有望品種の改良をめざす。一方、専業農家だけでなく家庭果樹の愛好家にも栽培技術を伝え、農業の裾野拡大に情熱を注いでいる。

文・木下正美 写真・早田均



花澤さんはハウス50aでみずから育種したマスカット系ブドウを栽培。苗木の販売も手がけている。『瀬戸ジャイアンツ』は毎年、全国で7500株（35ha分）規模で増えているという



『瀬戸ジャイアンツ』は9月上旬に成熟する黄緑色の高級マスカット。1粒重20gの超大粒種で、糖度は18～19度。種なしで皮が柔らかく、丸ごと食べられる

花澤茂さん（75）は、岡山県内の農業高校などでブドウ作りの指導に携わって以来、この道五十年になる。平成元年に教職を退き、岡山市瀬戸町で「花澤ぶどう研究所」を開設して、みずから生産を手がけるようになってからも、数多くの農業者や研修生が教えを乞いに訪れ、「ブドウの先生」として慕われている。

育種家として、その名を一躍全国に知らしめたのは、種なしで皮ごと食べられる新タイプの高級マスカット『瀬戸ジャイアンツ』の開発だ。『ネオ・マスカット』にロシア南部原産の『グザルカラ』をかけ合わせて育成。平成元年に種苗登録し、大ヒット作となった。

育種に乗り出したのは、教員時代の昭和四十年代後半から。岡山県が誇った特産品「キャンベル」が、種なしの「デラウェア」や大粒種の「巨峰」に押され始めたことがきっかけだった。

「消費者に喜ばれるとともに、生産者が胸を張って栽培でき、収益も上げられるブドウを作りたいかったですよ」

品種の改良には、交配から始まって採種、実生苗の育成・栽培、優良個体の選抜、二世代の試作と、最低でも十年はかかる。しかも、有望品種は、千個の種をまいて一つ生まれるかどうかといわれる。確率の低い、困難な仕事だ。

花澤さんは、国内外から約二百七十種にのぼる親木を取り寄せ、五百組み近い交配を手がけてきた。まいた種は、優に



育種に関心のある農家も多く、花澤さんはそのノウハウも教える。これからも有望品種の改良とともに、農業に夢をもつ人を育成していく



花澤さんが 教える ブドウ栽培の ポイント

①定植と雨よけ

定植は休眠期の11月～2月。春先から夏にかけては多雨多湿で病害虫の発生が多いため、できれば雨よけ栽培が好ましい。

②芽かきと花房の管理

春先から発芽が始まる。1節の芽から2～3芽発芽して新梢が伸びる。芽かきし、1枝の花房数も1枝1房にする。

③新梢の摘芯

初夏、枝や新梢と、花穂の生長が重なり養分競合が起こる。放置すると実どまりが低下するため、開花直前に枝の先を摘み、伸長を抑える。その後発生する新梢もそのつど摘む。

④結果量の調節

6～8月、肥大してくる果粒を間引く。品種にもよるが、1房当たり約200粒を30～60粒に調整する。

一万を超える。
「相撲でいえば役付力士になれないものは、責任をもって農家に渡せません」と、花澤さんは話す。

農業の底辺を広げて 生産振興をめざしたい

これまで、世に出した品種は「瀬戸ジヤイアント」をはじめ「ハイベリー」「マスカット・デューク・アモーレ」など八品種。いずれも欧州系のマスカット種で、アメリカ系の『巨峰』と違い、肉質がしっかりと独特の歯ざわりがあるのが特徴だ。

「消費者の嗜好の変化を読むなど、将来を見ずえることも大切です」

花澤さんたち有志は、平成七年に『瀬戸ジヤイアント』を「桃太郎ぶどう」のブランド名で商標登録。農家仲間と「桃

太郎ぶどう生産組合」を結成し、生産振興を図ってきた。当初、二十戸余りだった組合員は現在、県内全域で百二十戸。組合以外の農家を合わせると、栽培面積四十ヘクタール、生産量百十二トンと急成長している。マスカットの王様といわれる「マスカット・オブ・アレキサンドリア」よりも高値で取引されているのが自慢だ。

そんな花澤さんだが、平成八年から農業を志す人や主婦らを対象に家庭果樹を楽しむ会を主宰している。

「昔ほどの家にも庭先果樹や一坪農園があつて、生活の支えになりました。日本の将来のために、蓄積した技術を多くの人に広め、農業を振興していきたい」

それが、農家の次男に生まれ、戦後の食糧難を目のあたりにして得た花澤さんの人生訓であり、目標でもある。